397
45

印度統治改革問題

始

印度統治改革問題

拓殖局

397-45

帝國圖書館藏

本書ハ印度統治政策研究ノ一端トシテ囑託吉村源太郎ノ起稿スル所ナリ、今印刷シテ謄寫ニ代ユ

大正九年八月

拓殖局

大正
9. 11. 6
寄贈

寄贈本

印度統治改革案

一九一七年八月二十日印度大臣モンテーグハ下院ニ於テ印度統治ノ根本政策ヲ宣明シタリ、曰ク「英帝國ノ構成部分トシテノ印度ニ於テ責任政府ノ進歩的實現ヲ目的トシ自治制度ノ漸進的發達ヲ圖ルコト」此ノ政策ノ要點ハ三ニ分ツコトヲ得。

(一)最後ノ目的ハ責任政府(立法議會ニ對シテ責任ヲ有シ其ノ信任ノ有無ニ依リ進退スル政府)ノ樹立ニ在ルコト。

(二)右目的ヲ實現スル手段ハ漸進的ナルコト。

(三)印度ハ英帝國ノ一部タル地位ヲ保持スルコト。

是ナリ。

印度大臣ハ右ニ述ヘタル根本政策ノ實行ヲ準備スル爲、一九一七年ノ末、印度ニ渡航シ總督チエルムスフオードト共ニ各地ヲ巡歷シテ諸方面ノ人士ト會見シ、親シク其ノ印度統治ニ關スル意見ヲ聽キ、大臣及總督ノ連名ヲ以テ印度政治改革ニ關スル報告(Report on the Indian Constitutional Reforms)ヲ發表シタリ、所謂モンテーグ、チエルムス、フオード報告是ナリ。

本編ハ右モンテーグ、チエルムスフオード報告ノ要旨ヲ叙シ之ニ對スル批評ヲ略述スルヲ目的ト

ス、而シテ該報告ニ示セル改革案ハ印度ノ各州(Province)ヲ中心トシテ行政組織ヲ變革セントスルモノナルカ故ニ先ツ現行印度行政ノ組織ニ付其ノ梗概ヲ記述スヘシ。

印度ノ統治ハ總督ニ委任セラル、總督ノ下ニ行政及立法ノ二會議アリ、行政會議ハ總督ノ外ニ七人ノ議員ヨリ成リ、内一人ハ軍司令官ニシテ臨時議員タリ、行政會議ノ議員ハ行政各部ノ長官タリ、但シ外務ハ總督ノ管掌スル所トス。

總督府ニハ又立法會議アリ、一九〇九年ノモーレー、ミント改革(モーレーハ印度大臣、ミントハ總督)ニ依テ現在ノ組織トナリタルモノニシテ改革ノ趣旨ハ(一)國内ニ於ケル各種ノ利益ヲ公平ニ代表スルヲ得セシムルコト(二)行政ノ性質ヲ決定スルノ力ヲ立法會議ニ與フルコトニ在リト言ハル、立法會議ハ行政會議ニ議員ヲ增加シテ設ケラルルモノナリ、其ノ增加議員ハ六十人ニシテ内三十五人ハ總督之ヲ指命シ、二十五人ハ選擧ニ依ル、指命議員中官吏ハ二十八人ヲ超ユルコトヲ得ス、其ノ非官吏議員中三人ハ夫々パンヂヤブノ回教徒、バンヂヤブノ地主及印度商業界ノ指定スルモノトシ、殘リノ四人ハ特別事項ノ專門家又ハ小利益ノ代表者トス、選擧ニ依ル議員二十五人中十一人ハ地方立法會議ノ非官吏議員ニ依テ選擧セラル、一人ハ中央州ノ郡會(District of Local Boards)ニ依テ選擧セラル、(中央州ニハ立法會議ナキ爲ナリ)六人ハ六箇ノ州ノ地主タル選擧人ニ依テ選擧セラレ、五人ハ五箇ノ州ノ回教徒ニ依テ選擧セラレ、二人ハカルカツタ及ボンベイノ商業會議所ニ依テ選擧セラル、議員ノ任期ハ三年トシ三年毎ニ總選擧ヲ行フ。

立法會議ハ豫算ニ關シテモ權限ヲ有ス、議員ハ課稅、借入金、又ハ地方政府補助金ノ變更ニ付決議ヲ動議スルコトヲ得、此等ノ決議カ決定セラレタル後收入又ハ支出豫算ニ付決議ヲ動議スルコトヲ得、或種ノ事項例ヘハ關稅、陸軍費ハ討論ヨリ除外セラル、當局者ハ是等ノ論議ヲ考量シタル後最後ノ豫算ヲ作成提出ス、此ノ豫算ニ對シテハ論議ヲ許スモ決議ヲ爲シ贊否ヲ投票スルコトヲ得ス、理論ストシテハ政府ハ會議ノ決議ニ拘束セラルルコトナシ、然レトモ實際ハ政府ハ常ニ多數ヲ占ムルカ故ニカカル問題ノ起ルコトナシ。

尙議員ハ公益事項ニ付論議ヲ開始スルノ動議ヲ提出スルコトヲ得、又一切ノ問題ニ付質問ヲ爲スノ權ヲ有ス。

立法會議ハ英國議會ノ法律ノ下ニ於テ一切ノ立法ヲ爲スコトヲ得、然レトモ印度ノ公債又ハ收入、英國臣民ノ宗教陸海軍力ノ訓練又ハ維持及外交ニ關スル議案ハ豫メ總督ノ承認ヲ得ルニ非レハ議員ノ提出ヲ許サス。

英領印度ハ行政上十五ノ州(Province)ニ分タル、マドラス、ボンベイ、ベンゴール、アグラ及

ウード合併州、パンジャブ、バーマ、ビハル及オリツサ、中央州及ベラル、アツサム、西北國境州、アジメル、メルワラ、クールグ、バルチスタン、デリイ、アンダマン及ニコバル諸島是ナリ。

州政府ノ組織及權限ハ其ノ重要ノ度ニ應シテ差別アリ、州政府ノ首長ハ知事ニシテ、マドラス、ボンベイ、ベンゴールノ三州ニ於テハ之ヲガヴアナー(Governor)ト稱シ、合併州パンヂヤブ、バーマ、ビハル及オリツサノ四州ニ於テハ之ヲリユーテナント、ガヴアナー(Leutenant-Governor)ト稱シ其ノ他ノ州ニ於テハ之ヲチーフ、コンミツショナー(Chief Commissioner)ト稱ス、ガヴアナーハ皇帝ノ任命ニ係リ或種ノ事項ニ付テハ直接ニ印度大臣ト交渉スルコトヲ得、是レ他ノ知事ノ有セサル特典ナリ、リユーテナント、ガヴアナーハ總督カ皇帝ノ認可ヲ得テ之ヲ任命シ、チーフコンミツショナーハ總督之ヲ任命ス。

マドラス、ボンベイ及ベンゴールニハガヴアーナーノ下ニ行政會議アリ、又リユーテナント、ガヴアナーノ下ニモ行政會議ヲ置クコトヲ得ル規定ナルモ現ニ此ノ規定ニ依テ行政會議ヲ有スルモノハビハル及オリツサノ一州アルノミ而シテ行政會議ハマドラス、ボンベイ及ベンゴールニ在テハ普通任用ニヨル官吏(Indian Civil Service)二人ト印度人一人ヲ以テ之ヲ組織シ尙印度大臣ハ更ニ一人ヲ增加スルノ權限ヲ有スルモノトシ議員ハ凡テ皇帝ノ任命スル所トス、ビハル及オリツサニ在テハ普通任用ニ依ル官吏一人ト印度人一人トヨリ成リ議員ハ總督カ皇帝ノ認可ヲ得テ之ヲ任命スルモノトス。

マドラス、ボンベイ、ベンゴール、合併州、ビハル及オリツサ、パンチヤブ、バーマ中央州及アツサムノ九州ハ立法會議ヲ有ス、立法會議ハ知事、行政會議員及指名又ハ選擧サレタル議員ヨリ成ル例ヘハボンベイニ付テ云ヘハ其ノ立法會議ハ職務上當然議員タルモノ四人(內三人ハ行政會議議員)及其ノ他ノ議員四十四人ヲ以テ組織セラル四十四人中二十三人ハ知事ノ指名スルモノニシテ(內官吏ハ十四人ヲ超ユルコトヲ得ス)二十一人ハ選擧ニ依ルモノトス、(故ニ官吏議員ハ多數ヲ制スルコトナキモ政府側ノ議員ハ多數ヲ得)而シテ右選擧ニ依ル議員中八人ハ市及郡ニ依リ、四人ハ回教徒ニ依リ、三人ハ地主ニ依リ選擧セラル、此ノ外ニボンベイ大學ボンベイ市ボンベイ商業會議所、カラチ商業會議所、紡績工場所有者協會及印度商業協會ハ各一人ノ議員ヲ選擧ス、ボンベイ州以外ノ立法會議モ亦之ニ類ス、右州ノ立法會議ノ組織ハ又一九〇九年ノモーレー、ミント改革ニ依リ現在ノ組織トナリタルモノニシテ該改革ハ舊制ニ對シマドラス及ボンベイノ立法會議ノ組織及權限ヲ改メ議員ノ數ヲ二倍以上トシ特別ニ組織セレラタル選擧人ニ依ル選擧ヲ施行シ、議員ニ對シ財政事項ニ關スル討論及動議ヲ爲シ、一般公益事項ニ關シ動議ヲ提出スルノ權ヲ與ヘ

又質問權ヲ擴張シタリ。

財政ニ關スル議事ノ方法ハ總督府ノ立法會議ニ同シ、政府ハ會議ニ束縛セラルルコトナシ。

州ハ通常之ヲ縣ニ（division）別チ更ニ縣ヲ郡（district）ニ別ツ郡ハ行政ノ單位トシテ地方行政上重要ナル地位ニ在リ、印度ヲ通シテ其數二百五十ヲ超エ廣袤ハ平均四、四三〇方哩、人口ハ平均九三一、〇〇〇ヲ算ス、郡ノ首長ハ（Collector and District=Magistrate）又ハ（Deputy Commissioner）ト稱シ行政上ニ權限ヲ有スルノミナラス始審トシテ裁判權ヲ有スルモノナリ。

印度地方ノ行政組織ニ付テハ一方ニ極端ナル集權論者アリ、他方ニ極端ナル自治論者アリタルカカーゾン卿ノ總督ヲ退キタル以來分權論ハ漸次勢力ヲ占メ英國政府ノ方針モ州政府ノ權限ヲ增加スルト共ニ印度政府ノ監督ト干涉トヲ少カラシムル傾向ヲ有スルニ至レリ、蓋シ印度ニ於テ英國ノ統治ヲ維持セムト欲セハ總督ノ至上權ヲ損スルカ如キハ英國政府ノ堪ユル能ハサル所ナルモサリトテ時代ノ趨勢ト印度民心ノ要求ニ應シ印度ノ政治上ニ印度人ノ參與ヲ擴張スルハ亦已ムヲ得サルノ方策ト言フヘク、問題ハ如何ニシテ總督ノ最高權ヲ害スルコトナク、分權ノ施設ヲ爲シ得ヘキヤニ在リ、モンテーグ、チエルムスフオード報告ハ之ニ對スル解答ヲ與ヘントシタルモノニ外ナラス。

右報告ニ言ヘルカ如ク一九一七年八月二十日ノ聲明ハ印度史上最モ重大ナル宣言ニシテ舊時代ノ終了ト新時代ノ開始トヲ告クル警鐘ナリ、舊時代ニ於ケル英國ノ印度統治ハ人民ヲシテ國政ニ參與シ政治ヲ批評スルノ機會ヲ漸次ニ得セシムルノ方針ヲ取リタルモ其ノ組織ハ要スルニ專制政治ナリ、然ルニ印度大臣モーレー卿ト印度總督ミントー卿トノ協議ニ成ル行政改革ハ失敗ニ歸シ、地方分權ニ關スル委員會及印度官吏任用ニ關スル委員會ノ調査報告モ實行ヲ見ルニ至ラス、一九一一年ニ於ケル英國皇帝及皇后ノ印度巡歷ハ深キ印象ヲ人民ニ與ヘタルニ拘ラス、印度人民ハ一層實質的ニ國政ニ參與センコトヲ要求シ過激ナル政治運動ヲ鎮壓セントスル施設又ハ人種的差別ヲ含ム施設ニ對シテハ一齊ニ反對スル有樣トナリキ、大戰ハ斯ル際ニ爆發シタリ、而シテ印度人民ハ帝國ノ爲ニ忠誠ノ熱情ヲ披瀝シ敵國カ印度ニ叛亂ヲ起サシメントシタル企圖ハ畫餅ニ歸シタリ之ト同時ニ印度人民ハ英帝國ニ於ケル印度ノ地位ヲ向上セムコトノ思望ヲ進メ、英政府ハ其ノ希望ヲ容レテ初メテ印度代表者ヲ帝國會議（Imperial Conference（拙稿英帝國統一問題參照）ニ招致シ、一九一八年帝國軍事內閣（Imperial war Cabinet 同上參照）ヲ創設スルヤ復タ印度代表者ヲシテ濠洲、加奈陀、南阿聯邦等自治領ノ代表者ト共ニ之ニ班列スルヲ得セシメタリ、大戰ノ當初ニ於テハ政治運動ハ一切停止セラレタルノ觀アリシモ、戰爭ノ荏苒久シキニ亘ルニ及ヒ政治的紛

爭ハ再ヒ擡頭シ、民族自決ノ權利ニ基キ新ニ自決ヲ要求スルノ聲高ク、從來印度ノ二大宗徒ヲ代表シ互ニ政治上ニ反目嫉視セル印度國民會議（Indian National Congress）ト回教徒同盟（All India moslim Legeve）トハ連盟シテ印度改革案ヲ決議シ協同一致シテ自治ノ要求ヲ貫徹セントシ遂ニ印度ニ於テ自治同盟（Indian Home Rule Legeve）ノ設立ヲ見ルニ至レリ。

報告ハ是等ノ情勢ヲ顧念シテ論シテ曰ク大戰ノ印度ニ及ホセル深クシテ永久的ナル影響ハ二ノ主ナル方向ニ於テ見ルコトヲ得ヘシ、印度人民ヲシテ新ナル自尊ノ意味ヲ會得セシメタルコトハ其ノ一ナリ、印度人民ヲシテ今次ノ大戰ハ自由ト壓制トノ爭ナリ、小國民ノ權利ノ爲ニシ且一切ノ國民ノ自己ノ運命ヲ支配スル權利ノ爲ニスル爭ナリト觀念セシメタルコトハ其ノ二ナリ。

（一）印度ハ最モ峻烈ナル試錬ニ會シテ克ク之ニ堪ヘ其ノ力量ノ決シテ英帝國ノ自治領ノ後ニ在ラサルコトヲ深ク感シタリ、而シテ其ノ向上セル地位ノ英國及世界ニ於テ認識セラレムコトヲ望ムニ至リタリ、英國モ亦此趨勢ヲ察シ、印度人民ニ對シ、ヨリ大ナル信任ヲ與ヘ、ヨリ自由ナル政治ヲ施スノ至當ナルヲ信シタリ、而シテ印度ノ政治組織ノ如何ニ變更セラルヘキカハ暫ク措キ、其ノ變更ハ印度人民ノ功績ニ對スル報酬タルノ意味ニ於テスヘキモノニアラスシテ印度ノ發達ヲ認識セルニ基クヘキモノナリト言ハサルヘカラス。

（二）英國ハ歐洲ニ於テ自由ノ爲ニ戰ヘルナリ、英國カ印度ニ對シ其ノ戰ノ目的トスル所ノモノヲ拒ム能ハサルハ見易キ理ナリ、況ンヤ英國ノ戰ヘルハ印度ノ血ト財トノ援助ヲ受クルモノナルニ於テヲヤ、露國ノ革命ハ印度ニ於テハ專制政治ニ對スル勝利ナリト思考セラレタリ、其ノ無政府ト瓦解狀態トニ拘ラス印度人民ノ政治的要望ニ新ナル刺激ヲ與ヘタリ、獨逸軍國主義ノ打破ヲ絕叫シ民族自決ノ權利ヲ高唱シタル英米政治家ノ議論ハ印度ノ輿論ニ多大ノ影響ヲ及ホシ自治ノ要求ニ對シ新ナル勢力ト活氣トヲ寄與シタリ。

印度ニ於ケル形勢ノ變化ハ前總督ハーヂンジ卿ノ注意スル所ト爲リ其ノ退任ニ先チ內密ニ形勢ノ推移ニ應スルノ準備ニ著手シタリシカ、現總督チエルムスフオード卿ニ至リ亦之ヲ繼續シ、自治運動ノ勃興ト共ニ行政上ノ困難益々加ハルニ及ヒ遂ニ英國政府ハ八月二十日ノ聲明ヲナスニ至リシナリ。

曩ニ述ヘタルカ如ク印度ノ中央政府及地方政府ニ於ケル行政會議及立法會議ハモーレー、ミント改革ニ依リ多少民衆ノ意志ヲ會議ニ發表スルノ機會ヲ與フルニ至リタルモ所詮ハ從來ノ專制政治ノ範疇ヲ脫セス、徒ラニ空名ヲ與ヘテ一時ヲ糊塗シタルノ觀アリ、元來印度ノ立法機關ハ其初ハ單ニ法律ヲ制定スルカ爲ニ設ケラレタル委員會ニ過キス、人民ノ苦情ヲ攷察シ又ハ政府ノ施設

ヲ調査スルノ權限ナク、彼等ノ前ニ提出セラレタル法案ニ付決議ヲナスニ止マルノミ、一八六一年ノ法律ハ非官吏タル少數ノ印度人ヲ加ヘ、一八九二年ノ法律ハ更ニ一歩ヲ進メ、選擧制度ヲ採用シ會議ニ與フルニ質問ヲ發シ豫算ヲ論議スルノ權ヲ以テシタリ、(豫算ヲ議決スルノ權能ハ付與セラレサリキ)次テ行ハレタルモーレー、ミントノ改革ハ半内部的ニシテ半外部的ナル原因ニ基ケリ、ミント總督ノ解決セントシタル問題ハ印度ニ於ケル英國勢力ノ基調ヲ爲ス二箇ノ要素ヲ如何ニシテ一箇ノ政府中ニ收ムヘキヤト言フニアリ、二箇ノ要素トハ印度古代ノ政治ヨリ傳來セル專制ノ原理ト英國ノ制度ヨリ傳來セル立憲ノ原理ト是ナリ、印度政府ハ此ノ二要素ヲ打シテ一丸ト爲シ立憲的專制ヲ創設セント企テタリ、即チ法規ニ由テ施政ヲ爲コト、社會ノ各種ノ利益ヲ代表スル者ノ意見ヲ徵スルコト及優越ニシテ絶對的ナル權力ヲ自己ニ留保スルコト是ナリ、而シテ貴族階級及中流階級ヲ懷柔シテ權力ノ下移ヲ防キ印度ノ制度ノ民主化ヲ抑止セントシタリ。

當時モーレー卿ハ是等ノ改革ヲ以テ印度ニ於テ議會制度ヲ樹立スルノ階梯タラシムルノ意志ハ毫モ之ナキコトヲ明カニシタリ、然レトモ彼ノ一九〇九年ノ改革ハ印度ノ政治問題ニ對シ何等ノ回答ヲ與フルコトナク又之ヲ與フルノ力ヲ有セサリキ、選擧權ヲ與フルノ範圍狹少ニシテ選擧ノ方法モ間接選擧ナリシカハ選出セラレタル議員ヲシテ深ク人民ニ對スル責任ノ觀念ヲ領得セシムルコトヲ得サリキ、加之行政府ノ責任ハ依然トシテ舊ノ如ク、立法府ニ對シ責任ヲ負フコトナカリシカハ、行政府ハ質問ト批評トヲ受ルコト繁クナリタルニ止マリ、其ノ質問及批評ハ多ク高閣ニ束ネラレ責任ヲ以テ答辯セラルルコトナカリキ、即チ政府ハ依然權力ヲ擁シ、立法府ハ單ニ批評ヲナスニ過キサルナリ、サレハ地方政府ハ唯總督府ニ從屬シ總督府ハ唯印度大臣及英國議會ニ從屬スルノミニシテ印度人民ニ對スル責任ノ觀念ハ制度ノ上ニ於テハ認メラレサルナリ、斯ノ如キ制度ノ社會ノ進歩ニ順應シテ發展スルヲ得サルハ見易キノ理ナリ、又斯ノ如キ狀態ノ政治上ノ難局ヲ招致スルニ至ルヘキハ當然ノコトナリ、局面ヲ打開シテ將來ニ光明ヲ齎スヘキ改革ノ道ハ唯一アルノミ、何ソヤ、行政府ヲシテ人民ニ依リ選出セラレタル立法府ニ對シ責任ヲ有セシムルコト之ナリ、要スルニモーレー、ミントノ改革ハ印度ノ統治ヲ善意ノ專制タラシメ單ニ其ノ相當ト思惟スル場合ニ於テ人民ノ意嚮ヲ參酌セントスル舊思想ノ產物ニ外ナラサルナリ、政府ハ依然トシテ專制君主ナリ、而カモ屬僚ハ必スシモ之ニ滿足スルモノニアラス、印度人民ノ進歩ニ顧ミテ其ノ地位ノ不安ヲ感セサル能ハス、行政上ノ施設ハ自然ニ遲緩トナリ臆病トナラサルヲ得ス、印度ノ政治ハ舊制度トシテモ新制度トシテモ其ノ最善ナルモノヲ缺ケリ、蓋シ民主的政治ノ眞味ハ責任ノ二字ニ在リ、現在ノ立法府ハ此ノ眞味ヲ缺ケリ、故ニ印度政治ノ改革ハ此ノ眞味ヲ與フルコ

トヲ以テ其ノ基調トナササルヘカラス、而シテ責任感ヲ養成スルノ意義ニ於テハモーレ、ミント改革ハ舊制度ニ一歩ヲ進メサルナリ、尤モ此ノ改革ニ依テ與ヘラレタル議員ノ質問權、決議ヲ動議スルノ權利ハ遺憾ナク印度人議員ニ依テ利用セラレタルモ、政府側ノ議員カ常ニ多數ヲ占メ印度人議員ハ其ノ主張ヲ立法上ニ實現スルノ機會ヲ有スルコト少キカ爲、政府ニ反對スル決議ノ成立スルコトアルモ畢竟精神的勝利ヲ得タリト思惟セラルルニ過キス、是ニ於テカ政府側モ印度人議員側モ共ニ不眞面目ナル態度ヲ執ルニ傾キ、印度人議員ノ質問ヤ決議ヤ多クハ俗衆ノ人氣ニ投センコトヲ務ムルニ至ル、會議內部ノ事情如此ナルニ加ヘテ會議ノ外部ニ於テハ國民的自覺、及政權ニ對スル要望ハ敎育アル印度人間ニ擡頭シ來レルヲ以テ右ノ如キ會議ノ最早人民トノ關係ニ於テ安全瓣タルノ效力ナキニ至レリ、サレバコソモーレー、ミント改革ノ實施セラレタル當初ニ在リテハ改革運動ノ爲ニ印度敎徒ノ組織セル印度國民會議(Indian National-Congress)モ回敎徒ノ組織セル回敎徒同盟(All-India muslem League)モ其ノ存在ノ理由ヲ弱メラレタルノ感アリシガ改革セラレタル立法會議ノ現實カ暴露セラルルト共ニ其ノ勢力ヲ恢復シ更ニ一層ノ改革ヲ高唱スルニ至リシナリ。

然レトモ代議制度ヲ印度ニ輸入スルニ當リ大ナル障礙トナルモノハ(一)印度人民ノ大多數ヲ占ムル農民ノ政治的能力カ未タ全ク發展セサルコト其ノ一ナリ、英領印度ノ人口二億四千四百萬中二億二千六百萬ハ農民階級ニ屬ス、(二)男子ノ驚クヘキ多數カ文字ヲ解セス、女子ニ至テハ一般ニ無學文盲ナルコト又敎育アル階級ヲ連結スルニ與テ最モ力アル英語ノ智識カ僅カニ二百萬人ニ限ラルルコト、其二ナリ、(三)人種、宗敎及社會制度カ人民相互ノ間ニ幾多ノ鴻溝ヲ劃スルコト其三ナリ、然レトモ歐洲ノ敎育カ印度ノ政治上ニ甚大ナル勢力ヲ有スル事實ハ決シテ之ヲ看過スヘキニアラス、政治改革ノ成否ハ敎育アル印度人カ如何ニ愚蒙ナル民衆ニ同情シ且之ヲ政治上ニ代表スルノ能力アルヤ否ヤニ繫ルト言フコトヲ得ヘシ、『下級ノ民衆ハ自カラ其ノ利益ヲ擁護スルノ力ナク知識階級亦是等民衆ノ利益ヲ代表スルノ意志ナシ、一般民衆ノ利益ハ一ニ之ヲ官憲ノ管掌ニ委セサルヘカラス』ト言フ議論ハ從前一般ニ承認セラレタルトコロナルカ、近代敎育アル印度人ハ痛ク之ニ反對ス、曰ク歐人タル官吏ハ亞細亞人民ニ關スル智識ニ乏シク又言語ニ通達セサルカ爲、其ノ思想欲望ヲ理解スルニ於テ甚シク無能力ナリト、或ハ論シテ曰ク敎育ノ行ハルル範圍極メテ狹ク、種族制度ノ嚴守セラレ之ニ基ク習俗ノ存在スルカ爲ニ政治上ニ志アル階級ハ一般民衆ヨリ隔離シ、一般民衆ト歩調ヲ共ニスルコトナシト、是レ決シテ怪ムルニ足ルコトナシ、從來英國ノ敎育政策ハ少數者ヲ滿足セシムルコトヲ目的トシ、之ニ英國流ノ敎育ヲ與ヘ敎育ヲ多數者ニ普及セ

サルカ爲ニ生スヘキ結果ニ付テハ曾テ顧慮シタルコトナシ、英國ハ限ラレタル智識階級ヲ創造シタリ、是等ハ其ノ敎育ノ爲ニ進歩ヲ希フニ至レリ、敎育ノ一航民衆ニ普及セラルル迄ハ英國ハ彼等ノ進歩ヲ阻止スルコト能ハサルナリ、而モ英國敎育方針ノ缺點ノ一ハ敎育カ實際的ナラサルコト是ナリ、主トシテ法律、文字、學校敎育ニ關スル智識ヲ與ヘ、敎育ヲ受クルモノヲシテ言語文字ノ價値ヲ過當ニ尊重スルノ風ヲ養ヘリ、英國カ印度ニ於テ產業ニ依ル富ノ創造ヲ進メ、空理空論ニ墮セントスル從來ノ傾向ヲ打破セント努メタルハ漸ク今次ノ大戰ニ依リ產業ノ價値カ高調セラレタル以後ノ事ナリ、現在ノ敎育アル印度人ハ英國自身ノ創造シタルモノナル事實ハ英國ノ承認セサルヘカラサルモノニシテ其ノ利益ト弊害トハ英國ノ共ニ之カ引受ヲ辭ス可ラサル所トス。

英國政府ハ右述フルカ如キ現實ヲ承認シ印度ノ自治ニ向テ一歩ヲ轉スルノ對策ヲ畫セントス、モンテーグ、チエルムスフオード報告ニ揭クル對策ハ果シテ如何、以下其ノ梗概ヲ叙述スヘシ。

英國ノ印度統治ハ從來專制ヲ基調トシテ變革セラレタルモノナルコト曩ニ述フルカ如シ、而シテ現在ノ狀態ハ從來ノ政策ノ行詰ニ達シタルナリ、此儘ニテハ更ニ一歩ヲ開展スルノ望ナシ、將來ノ開展ハ唯印度人民ニ印度統治ニ對スル或種ノ責任ヲ有セシムルノ一途アルノミ、現在ノ政治機關ハ時代ノ要求ニ副フニ足ラス、其ノ活動ハ遲緩ニシテ圓滑ナラス、啻ニ印度人ノ改革ヲ要望スルノミナラス、官僚モ亦早晚變革ノ必要ヲ承認セリ、英國ハ印度人民ニ歐洲ノ歷史ト思想トヲ敎ヘタリ、其ノ結果ハ民族自決ノ要望トナレリ、現在敎育アル印度人カ要求スル所ハ過去百年ニ亘ル英國ノ施政ノ正當ニシテ自然ナル結果ナリ、今ヤ英國ハ古ニ還ルヲ得ス、其ノ敎育ヲ停止スルコトヲ得ス、而カモ從來ノ施設カ創造セル要望ヲ充スノ機會ヲ與ヘスシテ現在ノ方針ヲ持續センニハ、印度ノ政治ハ益々不人望トナリ、印度ノ人心ニ及ホス影響ハ益々惡クナリ行カム、英國ハ印度人ニ責任感ヲ與ヘ彼等ヲシテ其ノ欲スル所ヲ決定スルノ力ヲ得セシサルヘカラス、是カ手段トシテハ先ツ下級地方行政ヨリ着手スルコトヲ要ス、州ノ政治ニ付テモ今日ハ最早或種ノ支配權ヲ印度人民ニ與フルモ差支ナシ、州ノ政治ニ關シ完全ナル自治ヲ得タル後、更ニ進テ全印度ニ關スル事項ニ及フヲ相當トス、カク漸進的ナルヲ必要トスル所以ハ印度ノ選擧人及代議員ニ政治的訓練ヲ與ヘ印度自治ヲ擔當スルノ素地ヲ作ラシムルニハ相當ノ年月ヲ要スヘケレハナリ。

報告ハ更ニ一歩ヲ進メテ如上ノ手段ヲ執ルノ結果印度ト帝國トノ關係ハ人民ノ希望ニ基キ益々緊密ヲ加フルニ至ルヘシト論セリ、既往百年ニ於ル英帝國內ノ經驗ハ殖民地ノ人民ニ其ノ地方事務ヲ自治スルノ權能ヲ付與スルニ從ヒ殖民地ト帝國トヲ連絡スル紐帶ハ益々强固ヲ加フルコトヲ示セリ、國民的感情ノ存在、國民的文化ノ愛著及矜持ハ一層廣大ナル團體ノ一員タル觀念ト矛盾

セサルノミナラス反テ此ノ觀念ヲ强フスルノ傾ナキニアラス。

印度統治ニ關スル英國ノ目的ハ自治ヲ付與スルニアリテ其ノ手段ハ漸進ナリトセハ先ツ取ルヘキ具體的施設ハ如何ナルヘキヤ、報告ノ之ニ對スル回答ハ、選擧人ニ依リ選出セラレタル代議員ニ對シ當初ヨリ或種ノ責任ヲ負ハシメムトスルニ在リ、此ニ責任ト言フハ人民ニ對スル責任ナリ、而シテ印度ノ行政ハ下級地方政府、州政府及總督府ノ三階級ニ別ルルコト前ニ述ヘタルカ如キヲ以テ漸進的手段ヲ執ルトセハ代議員ヲシテ人民ニ對スル責任ヲ負ハシムルコトハ此ノ三階級ニ付一齊ナルコトヲ得ヘカラス、何トナレハ一人ニシテ同時ニ二人ノ主人公ニ仕フルヲ得サルハ當然ノコトナルヲ以テ代議員ヲシテ人民ニ對シ責任ヲ有セシムルトキハ其ノ程度ニ從ヒ上司ノ管督ハ緩フセサルヘカラス、然ルニ印度大臣ノ總督府ニ對スル監督ハ帝國ノ利益ヲ確保スル緊切ノ必要上之ヲ緩フスルヲ得ス、次ニ總督府ハ印度ノ防備ヲ支持スルノ根本的任務ヲ有シ、又州政府ハ治安ヲ確保スルノ重大ナル義務ヲ負フモノナルヲ以テ、上司ノ下司ニ對スル監督ヲ緩フスヘカラサル理由ハ上級ニ進ムニ從テ增加ス、從テ代議員ヲシテ人民ニ對シ責任ヲ有セシムル程度及範圍ハ下級行政ニ廣ク上級行政ニ狹カラサルヲ得ス更ニ他ノ方面ヨリ之ヲ論スレハ政府ノ任務中人民ノ最モ善ク理解スルモノハ個人ニ關係ヲ有シ又個人ノ屢々經驗シ得ルトコロノモノナリ、而シテ其ノ

最モ善ク理解スルモノニシテ初メテ最モ良ク之ヲ掌理スルコトヲ得ヘシ、故ニ下級地方團體ニ關シテハ左ノ原則ニ從フコトヲ要ス。

『下級地方團體ニ於テハ成ルヘク完全ナル人民ノ支配アルヘク成ルヘク官憲ノ監督ヨリ獨立スルコトヲ要ス』。

州政府ニ至リテハ之ニ異ル、英國ノ目的ハ責任政府ヲ實現スルニ在ルカ責任政府トハ(一)政治ヲ擔當スル者カ其ノ選擧人ニ對シ責任ヲ負ヒ(彼等ハ選擧人ノ爲ニ交迭セシメラル)(二)選擧人ハ代議員ニ依テ其ノ權利ヲ行使スルコトヲ得ルコトヲ意味ス、此ノ二個ノ條件カ完全ニ具ハルカ爲ニハ(一)一般民衆ノ利益ヲ代表スルニ足ル廣汎ナル選擧權ニ基ク選擧人ノ存在シ且其ノ選擧人カ代議員ノ選擇ヲ誤ラサル能力ヲ有スルコト及(二)政府ヲ組織スル者ノ任期ハ議會ニ多數ヲ制スル期間ニ限ルコトヲ前提トセサルヘカラス、然ルニ印度ニ於テハ是等ノ條件ノ存スルコトナシ、州ノ面積ハ廣大ニシテ利害關係ハ頗ル錯雜シ行政上ノ經驗ヲ有スル者ハ稀ニシテ選擧ノ經驗ニ至テハ殆ント絶無ナリト言フヘシ、故ニ先ツ政治的敎育ノ時代ナカルヘカラス、而シテ政治的敎育ハ唯責任觀念ヲ徐々ニ擴充スルコトニ依テノミ達成スルコトヲ得、故ニ先ツ行政事項中或種ノモノニ付テノミ責任ヲ有セシメ其ノ他ハ官憲ノ支配ニ留保セサルヘカラス、從テ第二ノ原則ハ次ノ如

クナルヲ要ス。

『州政府ニ在テハ先ツ或種ノ事務ニ付責任ヲ有セシメ漸次ニ完全ナル責任ヲ有セシムルニ至ルヘシ、即チ總督府カ其ノ責任ヲ全フスルニ妨ナキ限リ州政府ヲシテ立法及行政ニ關シ總督府ヨリ成ルヘク獨立セシムルコトヲ要ス』。

然レトモ政府事務ヲ二分シ、一ニ關シテハ人民ニ對スル責任ヲ認メ、他ニ關シテハ官憲ニ對スル責任ヲ認ムルコトハ行政上ニ紛雜ヲ招クノ虞アルノミナラス、之カ先例ノ徵スヘキモノナシ、斯ル制度ノ成功スルヤ否ヤヲ一ニ之ヲ將來ノ實驗ニ待タサルヘカラス、サレハ總督府ニ關シテハ州政府ト同一ノ制度ヲ採ルコトナク唯總督府ノ立法會議ヲ以テ一層印度ノ輿論ヲ代表スルモノタラシメ、其ノ輿論ヲシテ政治上ニ有力ナラシムルノ機會ヲ與フヘキナリ、是ニ於テ乎次ノ第三原則アリ。

『總督府ハ全然英國議會ニ對シ責任ヲ有シ重要ナル事項ニ關スル其ノ權威ハ他ノ爭議ヲ容レサルコト從前ト異ルナシ、但シ立法會議ハ擴張セラレ一層印度人ヲ代表スルモノナルコトヲ要ス』。

以上述フルカ如キ改革ハ英領印度ノ全部ニ亘リ實施セラルヘキモノニアラス。

(一)緬甸ハ軍事上ノ理由ニ依リ印度ニ包含セラルルニ過キスシテ實ハ印度ニアラス、其ノ人民ハ他人種ニ屬シ其ノ問題ハ全ク印度ノ問題ト異ルヲ以テ除外シ、(二)西北境州及バルチスタンハ軍略上ノ理由ニ依リ、(三)デリイ、クルグ及アジメル、マルワラノ如キ小地方ハ地方的ノ理由ニ依リ、又(四)人民ノ餘リニ野蠻ナル地方ハ凡テ改革ノ實施ヨリ除外セラルルモノトス。

改革案ノ最モ重要ナルハ州政府ニ關スルモノナリ、州ヲシテ自治ニ進マシムルカ爲ニ總督府ト州政府トノ收入ヲ別チ、州ハ特別ノ豫算特別ノ收入及或種ノ課稅力ヲ有シ、立法及行政上幾分總督府干涉ノ外ニ立ツ、州ノ行政機關ハ知事及行政會議ヨリ成リ、行政會議ハ歐人議員一人、印度人議員一人、選擧ニ依ル立法會議議員中ヨリ知事ノ指命シタルトコロノ印度人タル行政長官及高級官吏中ヨリ任命シタル議員ヲ以テ組織セラルル、此ノ行政機關ノ特色ハ印度人タル行政長官ニアリ、而シテ州ノ行政事務ヲ「留保事務」ト「委任事務」トニ二分シ、印度人タル行政長官ハ「委任事務」ヲ擔當シ、之ニ關シ人民ニ對シ責任ヲ有スルモノナリ、「委任事務」ノ何タルカハ別ニ設置セラルヘキ特別委員會ニ依リ決定セラルヘキモノナルカ報告カ例示スル所ニ依レハ地方稅、町村自治、小學中學及工業敎育、衛生、小工事等是ナリ（是等ハ第一次ノ委任事務タルヘク漸次ニ擴張セラレテ遂ニ委任ト留保トノ區別ナキニ至ルヲ期スルモノトス）是等ノ委任事務ニ關シテハ印度人タル長官ハ立法會議ニ對シ責任ヲ負フ、換言スレハ立法會議ハ實際上印度人長官ヲ罷免スル

ノ權力ヲ有シ、長官ノ任期ハ立法會議ノ信任アル間ニ限ルモノトス、其ノ立法會議ハ改革案ニ依レハ選擧ニ依ル議員ヲ多數トシ官吏非官吏中ヨリ指名セラルル議員ヲ少數トシテ改造セラルルモノトス、尙立法會議議員ノ選擧權ハ特ニ設ケラルヘキ委員會ニ依リ決定セラルヘキモノナルカ、成ルヘク廣ク民衆ニ及ホシ選擧ハ直接トシ又回教徒及其ノ他ノ少數者ヲ保護スル爲ニ部落代表ノ制ヲ維持スルコトトス。

「委任事務」以外ノ事務ハ之ヲ「留保事務」ト稱シ之ニ關シテハ知事ハ從前ノ如ク總督府及印度大臣ニ對シ責任ヲ負フモノトス。

等シク州ノ行政事務ナルモ「委任事務」ニ付テハ印度人タル長官ハ立法會議ニ對シ責任ヲ負ヒ、「留保事務」ニ付テハ知事ハ中央官憲ニ對シ責任ヲ負フコト前述ノ如シトセハ行政ノ統一ハ如何ニシテ達成セラルヘキヤ、知事及行政會議ハ州行政ノ全部ニ對シ管轄ヲ有スルモノナルカ故ニ委任事務ト留保事務トヲ問ハス行政會議議員ハ皆之ヲ論議スルノ權ヲ有ス、又全議員ヲシテ論議セシムルハ行政統一上頗ル便宜トスル所ナリ、唯責任ノ所屬ヲ異ニスルカ故ニ委任事務ニ對シ決定權ヲ有スルモノハ知事ト印度人タル長官トニシテ留保事務ニ對シ決定權ヲ有スル者ハ知事ト其ノ他ノ議員トナリ、知事ハ其ノ選擇ニ從ヒ全會議ヲ召集スルコトアルヘク、又特ニ責任ヲ有スルモノノミヲシテ商議セシムルコトアルヘシ、而シテ豫算其ノ他ノ行政事務ニシテ責任ヲ異ニスルモノノ間ニ相涉ル事項ニ關シ二者意見ヲ異ニスルトキハ最後ノ決定ハ知事ニ屬スルモノトス、要スルニ知事其人ニ依テ行政ノ統一ヲ維持スルコトヲ得ヘシ、然レトモ政府ノ決定ハ必スシモ選擧區民ノ意思ニ一致スルモノニアラス、印度人タル長官ハ政府ニ服從スヘキカ、選擧人ニ忠實ナルヘキカ困難ナル立場ニ陷ルヘキコト尙英國議會ノ議員カ內閣ト選擧人トノ間ニ立テ去就ニ迷フト同樣ナラムハ已ムヲ得サルコトナルヘシ。

總督府ノ改革ニ於テハ總督府カ至上權ヲ有スル點ニ付テハ何等ノ變更ヲ加ヘサルカ著シキ改正ノ點ハ現在ノ立法會議ニ代フルニ二個ノ合議體ヲ以テスルコト是ナリ、上院ハ Council of State ト稱シ選擧セラレタル議員ト指名セラレタル議員トヲ以テ組織セラレ政府側カ多數ヲ占ムルコトトシ、即チ議員ノ數ハ五十名トシテ外ニ總督カ議長ト爲ル、官吏議員ハ二十五名ヲ超ユルヲ得ス（行政會議議員ヲ含ム）總督カ指名スル非官吏議員ハ四名トス、選擧ニ依ル議員ハ二十一名內十三名ハ州ノ立法會議ノ非官吏議員ニ依リ選擧セラルルモノトス、下院ハ Legislative assembly ト稱シ議員數ハ約百名、其ノ內三分ノ二ハ選擧ニ依リ三分ノ一ハ指名ニ依ル、指名議員中ノ少クモ三分ノ一ハ少數階級又ハ特別利益ヲ代表スル非官吏議員トス。

而シテ立法手續ハ政府提出案ニ付テ云ヘハ大略次ノ如シ(一)政府ハ先ツ下院ニ提案シ其ノ通過後上院ニテ修正ヲ加ヘラレタルトキハ兩院共同會議ニ於テ最後ノ運命ヲ決スルコトトナル、然レトモ總督ニ於テ上院ノ修正ヲ以テ平和秩序又ハ善政ノ爲必要ナリト認證シタルトキハ下院ハ此ノ修正ヲ廢止變更スルコトヲ得サルモノトス。

(二)下院カ政府提案ヲ否決シタル場合ニ於テ總督カ其ノ提案ヲ以テ平和、秩序、又ハ善政ノ爲必要ナリト認證シタルトキハ政府ハ之ヲ新ニ上院ニ提出スルコトヲ得、上院カ之ヲ通過シタルトキハ下院ノ議ニ付セラルルコトナク直ニ法律トナルモノトス。

(三)緊急ノ場合ニ於テ兩院ノ議決ヲ待ツ遑ナキトキハ政府ハ上院ニノミ提案スルコトヲ得、此ノ場合ニ於テハ提案ハ上院ノ通過ニ依テ直ニ法律トナリ、政府ハ單ニ下院ニ報告スルニ止ムルモノトス。

要スルニ上院ハ立法上最高ノ權威タリ。

總督府行政會議ハ總督ノ外ニ七人ノ議員ヨリ成リ、其ノ一人ハ印度人タルヘキコト曩ニ述ヘタルカ、如クナルカ、改革案ニ依レハ更ニ一人ノ印度人議員ヲ加フルコトトナル、尙印度ニ樞密顧問ヲ置キ學識經驗ニ富ムモノ又ハ國家ノ勳功アリタルモノヲ以テ之ニ充ツ。

改革案ニ依レハ印度大臣ハ或種ノ事務殊ニ所謂委任事務ニ關シテハ從來ノ監督權ヲ失フコトトナル、之ニ伴ヒ印度省及印度會議ノ(India Office, Indian Council)ノ組織權限ニモ多少ノ變更アルヘシ、又印度ノ政務ニ關シ英國議會ノ監督ヲ劃切周到ナラシムル爲ニ從來印度政府ノ負擔シタリシ印度大臣ノ俸給ヲ英國ノ豫算ニ編入スルコトトシタリ。

次ニ英領印度ト土人州トノ關係ヲ親密ナラシメンカ爲ニ藩王會議(Council of princes)ヲ設クルコトトシ總督ハ此會議ヲシテ前述ノ上院(Council of State)ト共同シテ審議セシムル場合アルヘシ。

以上叙說スル所ハモンテーグ、チエルムスフオード報告ノ提議セル改革案ノ大要ナリ、抑々印度ニ自治ヲ與フルニ付テハ英國及印度ニ於テ有力ナル反對論ナキニアラス、英國政府カ既ニ自治政治ノ樹立ヲ以テ印度統治ノ目的ナリト宣言シタル今日ニ於テハ是等反對論ヲ穿鑿スルノ要ナキニ似タルモ其ノ論旨多少ノ理由ナキニアラサルヲ以テ試ミニ其ノ要點ヲ摘記スレハ左ノ如シ。

一、印度ニ自治ヲ與フルハ之ニ依テ印度人ノ英國政治ニ對スル不平ヲ一掃シ、又ハ少クトモ不平ヲ緩和スルノ目的ニ出ルハ言ヲ俟タス、然ルニ英國政府カ東印度會社ニ代ハリ印度統治ノ任ニ當リシヨリ五十年ノ過去ヲ回顧スルニ、政府ヲ民衆化スル手段ノ執ラレタルニ拘ハラス、印度人ノ英人政治ニ對スル反對ハ却テ益々高マレリ、恰カモ自治案ノ通過後愛蘭ノ英國ニ對

スル反感ノ益々盛ナルト同一ナリ、現任印度大臣及印度總督ノ政治革新ニ意アルノ明カナルヤ、英國政治ニ對スル反對運動ハ更ニ新ナル刺激ヲ受ケ、從來カルカツタ附近ニ局限セラレタル政治運動ハ今ヤ北方地方ニ擴マリ、英國政府カ鋭意改革案ノ實行ヲ準備シツツアル最中ニ於テ、言論ノ自由ハ制限セラレ、煽動者ニ對スル嚴刑ハ復活セラレ、簡易ナル手續ニ依ル裁判制度ハ創始セラルルノ已ムナキニ至レリ、モンテーグ大臣ノ宣明ハ印度ノ動搖ヲ鎮靜スルノ效ナク寧ロ之ヲ煽揚スルノ結果ヲ見ル、之ヲ過去ノ經驗ニ徵スルニ此ノ如キハ印度人當然ノ心理狀態ナリ。

二、代議制度ハ人民ノ統一ヲ前提トス、印度ニ於ケル煽動家等ハ「印度人ノ爲ノ印度」ヲ高調シツツアリ、然レトモ印度人トハ何ソヤ一個ノ國民ニアラサルナリ、サレハ政治革新ノ宣言セラルルヤ、人民ハ却テ疑惧ノ念ヲ抱ケリ、何トナレハ人民ヲ糾合シテ安寧秩序ヲ維持ノ力タルモノハ英國ノ政治ニ外ナラスシテ印度ノ自治ハ此ノ權力ヲ削弱スルノ結果トナルヲ虞レハナリ、改革ノ警鐘ヲ聞テ人民ノ動搖シタルハ英國ノ權威ノ衰頽ヲ證スルニ足ル。

三、自治政治ハ健實ナル輿論ノ存在ヲ基調トセサルヘカラス、然ルニ印度ニ輿論ナルモノアリヤ、改革ニ對スル印度政治家ノ態度ト要求トハ地方ノ異ルト宗教ノ異ルト、種族ノ異ルトヲ問ハス凡テ同一ナリ、同一ノ救濟ヲ求ム、從來反目嫉視シツツアリシ印度國民會議ト回教徒同盟トハ相聯合シテ改革意見ヲ提唱シタリ、印度ノ政界ハ此ニ至テ初メテ統一ノ氣運ニ會シタルカ如ク見ユ、是レ今次改革運動ノ特色ト稱スヘシ、然レトモ之カ實情ヲ討ヌレハ附加雷同ニ外ナラス、附加雷同ノ存スル所却テ眞正ナル輿論ノ存セサルヲ明ニスルモノニアラスヤ、印度ノ難局ハ實ニ此ニ在リト言ハサルヘカラス。

四、印度政治家ノ主張ヲ檢スルニ彼等ノ眞ニ欲求スル所ハ代議政治ニ在ルカ、又ハ善良ナル官僚政治ニ在ルカ、彼等ハ政府ヲ攻擊スルニ官僚政治ヲ以テスルモ、其ノ主張スル所ハ行政會議及立法會議ニ多數ノ印度人議員ヲ班列セシメ、多數ノ印度人ヲ官吏ニ任用セシメ遂ニ英人官吏ナカラシメントスルニ在リ、是レ實ニ自然ノ要求ナリト雖、畢竟スルニ英人ノ官僚政治ニ代フルニ印度人ノ官僚政治ヲ以テスルモノニアラスヤ、代議政治ハ印度ノ傳說ニモ歷史ニモ實例ナキトコロ、適々之ニ藉口シテ英人政治ヲ批難排斥スルノ具ニ供スルモノニアラサランヤ。

五、印度ニ於ケル宗教上ノ軋轢ト種族制度(Caste)ノ弊習ト智識階級ノ一般民衆ニ對スル態度ト初等教育ノ普及セサルトニ察スレハ、印度ノ代議政治ハ人口ノ九割ヲ超ユル無智無教育ナル

農民ヲシテ依然無勢力ノ地位ニ在ラシムルノミナラス、兎ニモ角ニモ印度ヲシテ今日アルニ至ラシメタル歐洲人ヲ閑却スルコトナリ、印度ノ將來ハ悲觀ヲ免カレサルヘシ。

六、立法會議ニ印度人ヲヨリ多ク班列セシムルトスルモ改革運動ヲ緩和スルノ望少シ、何トナレハ選擧法ニ過激ナル變革ヲ加ヘサル限リ議員ニ選擧セラルルモノハ地主、辯護士、市政ニ名望アルモノ等ニシテ今日改革ヲ鼓唱シツヽアル人士トハ關係少キモノナリ、眞ニ英國ノ政治ニ反對スルモノハ議員ニモアラス官吏ニモアラス、英國教育ヲ受ケタル民間約百五十萬人ニシテ學生ヲ中心トシ、法律家、新聞記者等其ノ多數ヲ占ム、サレハ此ノ施設ハ寧ロ改革運動ヲ煽揚シテ過激ナラシムルノ力アルモ之ヲ鎮靜スルノ效ナカルヘシ、要スルニ代議制度ニ依テ政治上ノ改革ヲナサムトスルモ從前ノ如ク殆ント何人ヲモ滿足セシムルニ足ラサル程ノ讓歩ヲ爲スカ、又英人ヲシテ忍フヘカラサル地位ニ陷ラシムルカ如キ讓歩ヲ爲スカ、二者其ノ一ヲ執ルノ外ナカルヘシ。

七、大戰ノ開始セラルルヤ總督府ハ印度ニ在ル英人ニ對シテ强制的ニ徵兵ヲ斷行シタルカ、印度人ニ對シテハ六千ヲ限リ義勇兵ヲ徵募シタリ、然ルニ平生印度國民會議（Indian National Congress）ハ印度ノ防備ハ印度人ヲシテ當ラシメヨト絶叫シツヽアリシニ拘ラス、最初應募シタルモノ僅カニ三百ニ過キス、後種々ノ手段ヲ盡シテ漸ク五千ニ達スルヲ得タリ、史家フラウドハ曰ク、「人民カ自治スルノ權利ハ自己ヲ防衛スルノ力ノ中ニノミ存ス」ト、知ルヘシ印度煽動家ノ求ムル所ハ眞正ノ意味ニ於ケル自治ニアラス、選マレタル階級ノ政治ニシテ、英國ノ銃劍ニ依テ之ヲ支持シツツ其ノ欲スル所ヲ行ハントスルニ外ナラサルコトヲ。

八、印度政治家ノ最少限ノ主張ハ印度ヲシテ濠洲、加奈陀等ノ自治領ト同地位ヲ占メシムルニ在リ、然レトモ自治領ハ英人ノ團體ナリ、英國ニ對シ遠心力ト共ニ求心力ヲ有ス、印度ハ然ラス、單ニ遠心力ヲ有スルノミ、自治領ハ假令獨立スルモ英國ト親善關係ニ立ツノ可能性アリ、印度ノ自治ハ自治領ノ獨立ヨリモ遙カニ英國トノ關係ヲ疎隔セシムヘシ。

以上ハ自治反對論ノ大要ナルカ、英國ノ輿論ハ大體ニ於テ自治論ニ贊成ナリ、唯タモンテーグ、チエルムスフオード報告中ノ改革案ニ對シテハ多クノ反對論アルヲ免カレス、而シテ改革案ノ最モ重要ナル部分ハ州政府ノ改革ナルカ、反對ノ最モ盛ナルモ亦此ニ在リ。

洲政府ニ關スル改革案ノ特色ハ二アリ、行政機關ヲ組織スル官吏中ニ人民ニ對シ責任ヲ負フ部分ト否ラサル部分トヲ含ムコトハ其ノ一ナリ、立法會議ニ第二院ノ存在セサルコトハ其ノ二ナリ。

第一　現在ノ州行政制度ハ、自治制度ヘノ階梯タル見地ヨリ考フルニ立法ト行政トノ關係ヲ調節スルコトヲ忘レタリ、非官吏ニシテ行政會議議員タルモノアルモ必スシモ立法會議議員中ヨリ選任セラルルニアラス、從テ立法會議議員ハ行政ノ細目ト困難トヲ理解シ洞察スルノ機會ヲ與ヘラレサルナリ、改革案ハ此ノ點ヲ慮リ、立法會議ノ選出シタル印度人ニ行政長官ノ椅子ヲ與ヘ其ノ進退ヲシテ立法會議ノ信任ニ係ラシメタルモノナルモ、同一行政機關中一部ハ委任事務ニ付人民ニ對シ責任ヲ負ヒ、他部ハ留保事務ニ付國王ニ對シ責任ヲ負フコトトナシタルハ

(イ)行政ノ統一ヲ害スルノ虞ナキニアラス、報告ハ此ノ點ニ關シ多少ノ辯解ヲ試ムルコト前述ノ如クナルモ理論上ニ巧ヲ弄スルニ過キス、實際ニ於テハ支吾扞格ヲ免カレ難シ、英人官吏ト印度人官吏トハ之カ爲ニ反目抗爭ノ勢ヲ助長セルルコトトナルヘシ、行政ハ單一不可分ナリ英人官吏ト印度人官吏トハ努メテ協力一致セサルヘカラス、寧ロ印度人官吏ヲシテ立法會議ニ對シ責ニ任セシムルコトヲ廢シ、英人官吏ト共ニ凡テ國王ニ對シ責ニ任セシムルノ簡易ナルニ如カス、而カモ是レ決シテ人民ニ對シ責任ヲ負フノ精神ト相悖ルモノニアラス、英國ニ於ケル責任政治發達ノ徑路ニ顧ミルニ英國ニ於テモ其ノ初ハ政府ハ單ニ國王ニ對シ責ニ任スルノミ議會ノ向背ニ依テ進退スルモノニアラサリシナリ、今日ニ於テモ憲法上ハ責任政治ノ明文アルニアラス、大臣ヲ任命スルモノハ依然トシテ國王ナリ、而カモ人民ニ對スル責任ト國王ニ對スル忠誠トハ抵捂ナク行ハルルニアラスヤ、印度ニ於テモ亦此ノ例ニ依ルヲ可トス當初ハ政府ハ國王ニ對シ責ニ任スルモノトシ漸ヲ追ツテ立法議會ニ對シ責任ヲ負フニ至ル樣ニ導クヘキナリ、改革案ノ意見ハ餘リニ機械的ナルノ非難アリ。

(ロ)洲ノ行政事務ヲ二分シ其ノ一ニ付テハ當局者ヲシテ國王ニ對シ責任ヲ負ハシムルハ、或種ノ責任ハ直ニ與ヘサルヘカラサルモ全體ニ關スル責任ハ直ニ與フルヲ得スト言フ理由ニ基クモノナリ、然レトモ行政機關ヲ組織スルモノヲシテ總テ不可分ノ責ニ任セシメ唯其中ノ或者ハ立法議會ニ於テ選出セラレタル議員ニ限ルヘシトスル制度モ亦同一ノ理由ニ依リテ之ヲ支持スルコトヲ得ヘシ。

(ハ)政革案ハ何カ故ニ行政機關ヲ不可分ノモノトシ唯其ノ一員ヲ議會ノ選擧ニ依ル議員トスル制度ヲ排斥シタルヤト言フニ、斯クスルトキハ政府ヲ組織スルモノハ凡テ一切ノ事項ニ付同一ノ責任ヲ負フノ點ハ頗ル論理的ナルモ議會選出ノ議員ノ責任ハ他ノ議員ト異リ立法議會ニ對スルモノトナリ、同一ノ責任ヲ有シナカラ、議員ニ依リ之ニ對シ責任ヲ負フヘキ權威ヲ異ニスルコトトナリテ不可ナリト言フニ在リ、然レトモ是レ過渡時代ニ免カルヘカラサル變態

ナルノミナラス、改革案ノ意見モ亦同一ノ批難ヲ蒙ラサルヘカラサルニアラスヤ、即チ改革案ニ依ルモ印度人議員ハ啻ニ立法議會ニ對シ責ニ任スルノミナラス、知事ノ忠言及監督ニ服セサルヘカラス、今日ノ英國ニ於テモ議員ハ政府ニ對スル服從ト選擧區ニ對スル忠誠トノ間ニ選擇セサルヘカラサル境地ニ立ツコトアリ、何ソ獨リ印度ノ過渡時代ニ於テ之ヲ排斥セサルヘカラサルヤ。

(ニ)改革案ハ行政會議議員ノ印度人タルト否トヲ問ハス行政事務ノ委任事務タルト留保事務タルトヲ論セス行政機關ハ外部ニ對シ一致シタル態度ヲ示ササルヘカラストスルニ拘ハラス、之ヲ實現スルニ足ルヘキ法規上ノ保障ナシ、何トナレハ印度人議員ノ責任ハ委任事務ニ付其ノ選擧區ニ對スルモノナルカ故ニ留保事務ニ付テハ政府ノ方策ヲ攻擊非難スルモ其ノ自由ニ屬スヘキノ理ナレハナリ。

(ホ)如何ナル事務ヲ委任事務ト爲スヘキヤハ將來委員會ノ決定ニ依テ確定セラルヘキモノナルカ改革案中ニ例示スル處ニ依レハ教育事務ハ小學、中學、實業教育ハ之ヲ委任シ、大學教育ハ之ヲ留保シ、農業ハ大體之ヲ留保シ、獸疫ハ之ヲ委任シ森林事務ハ之ヲ委任スルモノト留保スルモノトアリ、小灌漑工事ハ委任スルモ大工事ハ留保ス然レトモ同種類ノ行政事務ヲ異ナレル機關ニ掌理セシムルトキハ異ナレル政策ニ依テ行政スルコトヲ免カレ難ク、其ノ弊害ノ大ナルヘキハ固ヨリ多言ヲ挨タス、或ハ曰ク同種類ノ事務ニ關スル政策ヲ全體トシテ統一アラシムルハ知事ノ責任ナリト、然レトモ斯クスルトキハ留保事務モ印度人議員ノ勢力ニ左右セラルヘク、委任事務モ他ノ議員ノ意見ニ依リ影響ヲ受クルコトトナリ、畢竟行政事務ヲ二分シタル存在理由ハ消滅ニ歸スルコトトナルヘシ。

(ヘ)行政事務ノ二分ハ立法ト行政トノ軋轢ヲ來シ、行政會議議員中ノ議會選出議員ト他議員トノ疎隔ヲ招クニ至ルヘキハ明白ナルカ尚之ニ依テ議會選出議員ノ選擧區ニ對スル責任觀ヲ强フスルノ目的ヲ達スルヲ得サルヘシ、何トナレハ凡テノ行政命令ハ單一ニ政府ヨリ發セラレ政府ノ命令トシテノミ人民ニ受取ラレ、人民ハ委任事務ト留保事務トヲ區別シテ其ノ責任ヲ問フコトナカルヘキヲ以テナリ。

(ト)委任事務ト留保事務トヲ對照スルニ前者ハ小局ニ關シ後者ハ大局ニ關ス、然ルニ印度人官吏ハ委任事務ニ付テノミ責ニ任シ留保事務ニ付テハ責ヲ負フコトナシトスレハ、印度人ト英人トノ間ニ能力ノ軒輊ヲ公認スルノ嫌ナキニアラス是レ決シテ自治制度ヲ印度ニ將來スル所以ニアラサルナリ。

要スルニ行政機關ハ唯一ノ權威ニ對シ責ヲ負ハサルヘカラス、印度ノ今日ノ如キ過渡時代ニ於テハ其ノ權威ハ國王ナリ國王カ選擧民ノ意志ヲ容ルルトキハ政府ハ選擧民ノ意志ニ從フノ結果トナルモ政府ノ責任ヲ負フ所ハ必竟國王ナリ、從テ或場合ニハ政府ハ立法議會ヲ無視スルコトアルヘシ、又政府ハ一ナラサルヘカラス行政長官ノ責任ハ連帶ナラサルヘカラス、長官カ單ニ自己ノ所管事務ニ對シ責ニ任スルニ止マリ同僚ノ政策ヲ攻擊シ又ハ政府全體ノ政策ヲ攻擊スルコトヲ得ルカ如キハ責任政府ヲ建設スル所以ニハアラサルナリ。

然レトモ行政長官中ニ於テ立法會議ノ議員中ヨリ選任セラタレルモノカ國王ノ權威ト政府ノ連帶責任ニ服スルト同時ニ選擧民ノ監督ニ服スルコトハ之ヲ認容スルコトヲ得ヘシ、英國ニ於テモ聯立内閣ノ場合ニハ之ヲ認ム、或ハ曰ク此ノ如キ長官ハ選擧民ニ忠實ナランカ爲ニ動モスレハ辭職ヲ以テ政府ヲ脅カシ之カ爲ニ政務ノ阻害セラルルヲ免カレサルヘシト、然レトモ長官カ辭職ヲ以テ政府ヲ脅カサントスル場合ハ議會ノ有力ナル後援アル場合ニ限ルヘク、カカル場合ニハ政府ニ於テモ議會トノ關係上其ノ主張ヲ再考スルノ必要アル場合ナルヘク、兎ニ角行詰ニ陷ルノ虞アルコトナシ。

改革案カ行政機關ヲ組織スル官吏ヲ二種ニ別チ責任ノ屬スル所ヲ異ニシタルハ、印度人ニ自治的訓練ヲ與フル唯一ノ方法ハ完全ナル責任ヲ負ハシムルニ在ルノミト云フ理論ニ基クモノナリ、即チ所謂委任事務ニ付テハ英國ハ何等容喙スルコトナク成功モ失敗モ一ニ印度人ノ責任ニ歸セシムルコトヲ以テ其ノ趣旨トシタルナリ、然レトモ是レ必スシモ眞理ニアラス、一部ニ付テ全責任ヲ負ハシムルヨリモ、全部ニ對シ漸次其ノ責任ヲ加重シ行キ遂ニ完全ナル責任ヲ負ハシムルコソ、印度人ヲシテ自治ヲ會得セシムル良法ナリト云ハサルヘカラス、即チ政府ヲ組織スル官吏ハ其ノ立法議會ヨリ選擧セラルルト否トヲ問ハス過渡時代ニ於テハ凡テ政府ノ行爲ニ付國王ニ對シ連帶責任ヲ負コトトシ、立法會議ニ對スル政府ノ責任ニ至テハ時代ノ推移ニ一任シ、强テ制度上ニ明確ナル形式ヲ設クルコトヲ避クルヲ可トス、斯ノ如ク立法議會ヨリ任用セラルル官吏モ政府ノ施設ニ付テハ連帶責任ヲ負フモノトセハ其ノ職務ヲ、所謂委任事務ニノミ限定スルノ必要ナカルヘシ、而シテシテ政治的智識ト政治的訓練トノ熟スルニ從ヒ成ルヘク立法議會選出ノ議員ヲ以テ行政會議ニ班列セシムルコトトシ遂ニ行政會議ノ全員カ立法議會ノ議員タルニ至ラハ、知事ハ自カラ議會ニ勢力アル政黨ノ領袖ヨリ行政會議議員ヲ選任スルコトトナルヘシ理論上ヨリ云ヘハ印度ノ自治ハ總督府ニ代フルニ州政府ヨリ權力ヲ委任セラレタル聯邦政府ヲ以テスルニ及ヒ初メテ完全ナルヲ得ヘシ、此時ニ至ラハ知事ハ行政會議ノ議長タル地位ヲ人民ノ信任スル總理ニ讓リ今日

ノ英國皇帝ノ如キ立憲君主ノ地位ニ退クコトヲ得ヘキナリ。

第二　改革案ニ從ヘハ州ノ議會ハ一院制度ニシテ其ノ議員中ニ選擧區ヲ代表スルモノト特種ノ利益ヲ代表スルモノトアリ、一院制度ノ根據ハ（イ）行政ト立法トノ關係ヲ案スルニ一院ニテ既ニ充分行政機關ニ對シ厄介物ナリ、第二院ヲ設置セハ行政ノ機能ハ大ニ其ノ選用ノ敏活ヲ阻害セラルルニ至ルヘシト、是レ官僚的感情ノミ（ロ）假令第二院ヲ設クルモ第一院ノ爲威嚇セラルルヲ免カレサルヘシト、是レ官僚的恐怖ノミ、不當ナル立法ヲ Veto スルノ自信力ナキヲ暴露スルニ過キス（ハ）之ト反對ニ第二院ハ第一院ヲ脅威スルニ至ルノ虞アリト、是レ非官僚ノ猜疑ノミ、蓋シ一院ニシテ完全理想的ノモノナラハ强テ第二院ヲ設置スルノ必要ナシ、然レトモ諸國從來ノ經驗ニ依レハ完全ナル一院ノ見込ナキコト明自疑ヲ容レス、此ノ消極的理由ハ二院制度ノ有力ナル根據ナリ、既ニ二院ナラサルヘカラストセハ、同時ニ之ヲ設置スヘシ、過渡時代ニ於テハ第二院モ第一院ト同シク人民ニ政治的敎育ヲ與フルノ契機タラスンハアラス、果シテ敎育的施設ナリトセハ寧ロ早キニ及ンテ之ヲ設クルヲ可トス、又第一院ヨリ之ヲ見レハ第二院ノ設置ハ第一院ノ權限ノ制限ヲ意味スルモノナリ、第一院設立ノ後ニ至リテ第二院ヲ設ケントセハ第一院ノ大反對ヲ受クルハ勢ノ當然ニシテ其ノ設立殆ント不可能ト云フモ可ナリ。

然ラハ二院ノ組織權限ハ如何ニスヘキ。

上院（一）組織　當初ハ政府ノ任命ニ依ルヘシ、特種ノ階級ニ在テハ互選ト爲スモ可ナリ、知事ハ議長ノ職ニ當ルヘク其以外ニ於テハ官吏議員ナキヲ可トス。

（二）權限　下院ヲ通過セル議案ヲ審議シ全然否決スルカ又ハ修正ノ爲下院ヘ返送スルコトヲ得ヘシ、兩院ノ議合ハサルトキハ所謂英國ノ議會法ニ倣ヒ三會期引續キ下院ヲ通過セル議案ハ上院ニ於テ否決セラルルモ法律トナルコトトスヘシ、但シ知事ハ Veto ノ權ヲ有スルモノトス

其ノ他ニ於テハ兩院ノ權限ハ同等タルヘシ。

下院（一）組織　行政會議ノ官吏議員ハ當然下院ノ議員トナルコトトシ、其他ハ凡テ選擧ニ依ルモノトス、行政會議ノ上席議員ハ議長トナル或ハ議長ヲ選擧ニ依ラシムルモ可ナリ。

選擧ハ選擧區制ヲ執リ、從來ノ如キ町村部落ノ代表制ヲ廢スヘシ、或ハ現在ノ狀態ニ於テハ選擧區制ヲ執ルトキハ職業的政治家ノ跋扈ヲ誘致スルノ虞アリトシテ之ニ反對スルモノアルヘシ、然レトモ選擧民ヲ敎育シ訓練スルカ爲ニハ選擧區制ニ依ルノ外ナク、之カ爲多少ノ犧牲ヲ供スルハ已ヲ得サルコトナリ、多少ノ危險ハアリトモ上院アリ、政府アリ、サシタル弊害ヲ見ルコトナカルヘシ。

(二)權限　(イ)質問權　(ロ)決議權　(ハ)法律案提出權(或場合ニハ上院ノ意見ヲ無視スルコトヲ得)

以上ハ改革案ニ對スル有力ナル修正意見ノ大綱ナリ、蓋シ印度改革ハ過渡時代ニ於テハ英人ト印度人トノ一致協力ニ待タサルヘカラス、殊ニ敎養アル印度人ノ改革ニ對スル態度ト熱心トハ改革ノ成否ニ至大ナ關係ヲ有ス、過去ヲ顧ミレハ徒ラニ聲ヲ大ニシテ改革ヲ皷噪スル少數者ヲ除ク外、印度人民ハ一般ニ英人ノ指導監理ニ信賴シ自ラ進ンテ改革ノ衝ニ當ルノ意氣ト熱情トヲ示スコトナカリキ、而シテ英人側ニ在テモ亦左顧右眄シテ躊躇逡巡ノ陋態ニ出テ大膽ニ所信ヲ實行スルノ氣慨ナカリキ、一九〇九年ノ改革ヲ提議シタル自由黨ノ名士モーレー卿ノ如キニ至テモ、行政會議及立法會議ノ組織ニ於テ多少印度ノ輿論ヲ斟酌シタルニ拘ラス、「印度ニ自治制ヲ施クカ如キハ月世界ノ話ナリ」ト公言シテ憚ラサリシニ見ルモ、當時印度改革ニ對スル英人ノ態度ヲ推想スルニ難カラサルナリ、然レトモ大戰ヲ經タル今日ニ於テハ英人ノ印度ニ對スル意見モ大ニ變化シタリ、印度人ニシテ過激、突飛ナル言動ニ出ルノ外ナクンハ則チ已ム、苟モ責任ヲ自覺シ眞摯温健、周到ナル用意ヲ以テ其ノ力ヲ用ヒハ自治ノ光明ハ期シテ待ツヘキモノアルヘシ。

附錄

愛蘭法案

愛蘭法案 (Irish Bill)

多年英國政界ノ懸案タリシ愛蘭自治法ハ一九一四年一旦成立シタルモ大戰ノ勃發ニ遭ヒ實施ヲ延期セラレ今日ニ迨ヒシカ英國政府ハ當時ノ聲明ニ從ヒ且愛蘭ニ於ケル形勢ノ變化ヲ考量シテ去ル三月五日更メテ愛蘭法案ヲ下院ニ提出シタリシニ同三十一日下院ハ大多數ヲ以テ第二讀會ヲ通過シタリト謂フ同法案ハ未タ入手セサルヲ以テ茲ニ其ノ規定ノ詳細ヲ叙述スルコトヲ得サルモ新聞ノ報スル所ニ依リ其ノ大要ヲ說示スレハ左ノ如シ。

一、愛蘭ヲ南北ノ二地區ニ分チ、各區ニ立法議會(House of Commons)ヲ設ケ別ニ愛蘭統一ニ資スルカ爲、愛蘭會議(Council of Ireland)ヲ置ク。

一、北部議會ハベルフアスト市ヲ中心トシウルスター州中アントリム、ダウン、アルマハ、ロンドンデリー、フエルマナハ及タイロンノ六郡ヲ管轄シ、南部議會ハダブリン市ヲ中心トシウルスター州中ノ他ノ三郡竝ニレインスター、ムンスター及コンノートノ三州ヲ管轄ス。

一南北ノ二議會ハ共ニ一院制度ニシテ北部議會ハ五十二名ノ議員ヨリ成リ南部議會ノ議員數ハ百二十八名トス議員ノ選擧ハ比例代表制ニ依リ、其ノ任期ハ五年トシ議員タル資格及宣誓ニ付テ

ハ帝國議會ノ議員ニ關スル規定ニ依ルモノトス。

一、南北議會ハ各其ノ地區ニ於テ教育、地方行政、土地政策、農業、道路、橋梁、運輸、養老金、保險、市政、住宅、病院及各種ノ免許ニ關シ全權ヲ有ス。

兩議會ハ司法ニ關シテハ控訴院(High Court of appeal)ヲ除キ他ノ裁判所ノ法官ヲ任命スルノ權ヲ有ス、而シテ控訴院ノ法官任命ニ付テハ兩議會カ合意ヲ以テ之ニ關スル方法ヲ設クルニ至ルマテ帝國議會ニ於テ其ノ任命權ヲ有スルモノトス。

兩議會ハ絶對ニ信教ノ自由ヲ尊重スヘク國教ヲ定ムルコトヲ得サルモノトス。

一、帝國議會ハ右司法官任命權ノ外、愛蘭ノ警察權ヲ三年間留保シ又皇室、講和、宣戰、外交、軍事竝防備、造幣、國事犯、愛蘭以外トノ通商、郵便、航海(商船、無線電信及海底電信ヲ含ム)所得稅、剩餘利得稅、關稅及消費稅ノ徴收ニ關スル權限ヲ留保ス但シ郵便ニ關シテハ南北兩議會カ愛蘭自身ニ於テ之ヲ支配スルノ計畫ヲ立テ聯合行政委員會(後ニ說ク)及帝國議會ニ於テ其ノ支配ニ歸セシムルヲ相當ト認メタルトキハ之ヲ愛蘭ノ管轄ニ移スモノトス。

一、愛蘭ノ財政ニ關シテハ愛蘭ノ英本國ニ醵出スヘキ額ハ一九一九年及二〇年ノ二箇年間約一億八千萬圓宛トシ、北部ハ其ノ四割二分ヲ負擔シ南部ハ其ノ五割八分ヲ負擔スルモノトス、而シ

テ更ニ南北兩議會及帝國議會ヨリ各同數ノ委員ヲ選出シテ聯合行政委員會ナルモノヲ組織シ愛蘭ノ擔稅力及稅目ヲ決定シ英本國トノ權衡ヲ維持スルコトヲ努メ且一九二一年以後愛蘭ノ英本國ニ醵出スヘキ金額ヲ決定セシム、此ノ委員會ノ決定ハ五箇年間效力ヲ有スルモノトス。

一、愛蘭會議ハ議長及四十名ノ議員ヨリ成ル議長ハ皇帝ノ任命ニ係リ議員ハ南北兩議會ヨリ各半數ヲ選出スルモノトス、愛蘭會議ハ私法及鐵道ニ關スル立法權ヲ有ス。

(註、玆ニ私法(private Bill)ト謂フハ立法手續上ヨリ來レル名稱ニシテ主トシテ地方團體、會社、個人ニ關スル法律ナリ、斯ル法律ノ制定ヲ欲スルモノハ一定ノ手續ノ下ニ議會ニ請願シ議會ハ之カ制定ニ關シ異議アル者ニ對シ申出ヲ爲サシメ、略民事訴訟ノ形式ニ從ヒ請願者ト異議者トノ爭議ヲ裁斷シ、且公益上ノ得失ヲ考量シタル上法案ノ提否ヲ決定スルモノトス)

尙本會議ハ南北兩議會ヨリ委任セラレタル事項ニ付權限ヲ有シ又南北兩地區ニ亘ル問題ニ對シ意見ヲ述フルコトヲ得。

一、愛蘭會議設置ノ精神ハ之ニ由テ南北ノ統一ヲ促進シ將來愛蘭ニ唯一ノ立法議會ヲ樹立セントスルニ在リ、即チ南北議會ハ愛蘭會議ニ代フルニ一院又ハ二院ヨリ成ル全愛蘭議會ヲ設立スルノ權能ヲ有スルモノトス、而シテ全愛蘭議會ハ其ノ權限南北議會ヨリモ廣大タルヘク關稅及消費

稅ニ關スル權限ヲモ有スヘキナリ。

一、愛蘭ノ行政權ハ皇帝ニ存シ總督之ヲ代表ス、總督ノ任期ハ六年トス皇帝ハ何時ニテモ之ヲ免黜スルコトヲ得。

總督ノ下ニ大臣タルモノハ愛蘭樞密顧問タルコトヲ要シ、又議會ノ議員ニアラサレハ六ヶ月以上大臣タルコトヲ得ス。

一、控訴院ハ愛蘭全體ヲ其ノ管轄トス又特定ノ場合ニ限リ控訴院ヨリ更ニ英國上院ニ上訴スルコトヲ得。

一、總督又ハ愛蘭事務大臣ニ於テ愛蘭議會ニ附議セラレタル法案又ハ其ノ制定ニ係ル法律カ其ノ權限外ナルコトヲ認メ之ヲ速ニ決定スルノ必要アリト思惟シタル場合ニ於テハ其ノ旨皇帝ニ上奏シ皇帝ハ樞密院司法委員會ニ命シ之カ決定ヲ爲サシムルコトヲ得。

一、愛蘭ニ於ケル人、事項及物ニ對スル帝國議會ノ最高權ハ此愛蘭法案ニ依リテ何等ノ影響ヲ被ルコトナシ。

以上愛蘭法案ノ大要ニ依レハ本案ハ愛蘭ニ於ケル諸黨派ノ主張ヲ參酌シタル妥協案タルハ明瞭ニシテ愛蘭ノ黨派中自治ヲ憧憬スルモノハ獨リ愛蘭國民黨アルニ過キス、ウルスターノ統一黨ハ其ノ英國トノ統一ヲ要望スル見地ヨリ之ニ反對シ、若シ自治ノ愛蘭ニ付與セラルル場合ニハ愛蘭ノ分割ヲ賭シテモ其ノ主張ヲ貫クニ餘力ヲ剩ササラントシ、シンフエイン黨ハ固ヨリ純然タル獨立ヲ標榜スルヲ以テ英帝國ノ下ニ於ケル自治ニ至テハ其ノ如何ナル形式ヲ以テスルニ拘ラス斷乎トシテ同意ヲ表スルコトナシ、而シテ大戰以前ニ於テハ國民黨ノ勢力ハ愛蘭ヲ風靡シ、英國政府ハ之ト提携スルコトニ因リ僅カニ英國議會ニ多數ヲ制スルヲ得タル狀態ナリシヲ以テ自治案ハ有力ナル反對ヲ排シテ法律トナルヲ得タリシナリ、然ルニ戰時中ウルスターノ形勢ハ變化セサリシモ、シンフエイン黨ハ所謂民族自決主義ノ聯合國ニ依テ高調セラルルト呼應シテ愛蘭獨立ノ氣勢ヲ高メ、休戰後ノ總選擧ニ於テハ愛蘭人民ノ同情頗ル厚ク、國民黨ヲ散々ニ擊破シテ愛蘭黨中ノ最大多數黨トナレリ、然モ今回提出セラレタル愛蘭法案ハシンフエイン黨ノ主張ヲ以テ英帝國ノ利益ヲ害スルノミナラス、愛蘭人民多數ノ意思ニ反スルモノトナシ全然之ヲ顧慮セス、唯國民黨ノ主張トウルスターノ統一黨ノ主張トノ間ニ妥協ヲ圖ラントシタルモノナリ、果シテ然ラハ愛蘭法案ハ英國政府ノ期待ニ副フモノナリヤ、國民黨及統一黨ハ本案ヲ歡迎シ又ハ少クトモ之ニ反對セサルヤト謂フニ、最近新聞紙ノ傳フル所ニ依レハ統一黨ハ主義ニ於テ之ニ贊成シ、多少ノ修正ノ下ニ本案ノ通過ヲ計ラムトスルモ、國民黨ニ至リテハ斷乎トシテ之ニ反對シ本案ヲ以テ一九一四

年ノ自治法ニ比シ劣惡ナル立法ナリト宣言スルニ躊躇スルコトナシ。

今反對論ノ要旨ヲ擧クレハ第一、本案カ分割主義ニ本キ制定セラレタルコト是ナリ、本案ノ規定ニ依レハ愛蘭ヲ南北ノ二區ニ分チ之ニ立法議會ヲ設ケタルカ此等南北ノ議會ハ其ノ地區内ニ於テハ主權者ノ地位ヲ有シ之ヲ監督統理スルモノハ愛蘭内ニハ存スルコトナク、英國議會ノ理論上此ノ權限ヲ有スルモ、其ノ南北兩議會ニ對スル關係ハ濠洲又ハ加奈陀ノ立法議會ニ對スルト多ク異ルコトナカルヘシ、是レ愛蘭ヲ分割スルモノニアラスシテ何ソヤ、尤モ本案ハ南北議會ノ外ニ愛蘭會議ヲ設ケ將來單一議會設置ノ基礎タラシメントスルモノノ如クナルモ、其ノ權限ハ頗ル狹少ニシテ之ヲ變シテ單一議會タラシムルト否トハ一ニ南北兩議會ノ意思ニ繫ルサレハ本會議設置ノ終局ノ目的カ容易ニ實現セラレサルヘキハ見易キノ理ナリ、殊ニウルスターノ本案ニ對スル態度ニ見ヨ、ウルスターカ從來ノ熾烈ナル自治反對ヲ一擲シテ澁々ナカラモ本案贊成ヲ發表シタルハ其ノ眞意何レニ在リヤ、本案ニ依ル北部議會ノ權能ヲ極度ニ利用シテ從來ノ特殊ノ地位ヲ維持シ從テ全愛蘭ノ統一ヲ困難ナラシムルノ可能ナルヲ洞察シタルカ爲ナラスンハアラス。

第二、本案ハ愛蘭ノ國民的地位ヲ認メサルモノナリ、本案立法ノ趣旨ハウルスターノ自治反對ヲ緩和セムトシ特ニウルスターノ爲ニ一個ノ立法議會ヲ設ケ之ニ對立シテ南部ニモ亦一立法議會ヲ設

クルヲ必要トシタルナリ、即チ南北兩議會設置ノ精神ハウルスターヲ主トシ南部地方ヲ從トシタルナリ、換言スレハウルスターニ付テハ特殊國民タルノ地位ヲ認ムルモ愛蘭全體ニ付テハ其ノ一國民タル地位ヲ認メサルモノナリ、是レ即チ愛蘭全體ニ對シ自治ヲ付與スルノ精神ニ反スルモノニアラスヤ、濠洲、加奈陀又ハ南阿ニ對シ自治ヲ付與スルハ其ノ一國民タルノ地位ヲ承認スルモノナリ、愛蘭ニ對シ自治ヲ付與スル場合ニ於テモ其ノ自治ノ内容ハ兎ニ角亦宜シク同一ノ精神ニ基カサルヘカラス極言スレハ本案ノ自治ハ虚僞ノ自治ナリ、國民黨ヲシテ言ハシムレハ、英國政府ハ大戰ノ當初、自治法ノ實施延期ニ際シテ愛蘭人民ニ約束シタル所ニ違反シ、自治ノ虚名ノ下ニ愛蘭ヲ分割シ其ノ國民的自尊心ヲ傷クルモノナリ。

第三、本案ハ宗派ノ軋轢ヲ甚シカラシムルモノナリ、本案ハ信教ノ自由ヲ絶對ニ保障セムカ爲南北兩議會ニ對シ信教ノ自由ニ反スルカ如キ行動ヲ執ルコトヲ禁止セリ、然モ他ノ點ニ於テ本案ハ反テ宗派ノ軋轢ヲ激進スルノ傾向ヲ存ス、开ハ北部議會ノ管轄區域ヲウルスター全州トセス同州中六郡ニ止メタルコト是ナリ、蓋シウルスター統一黨カ自治ニ反對スル理由ノ一ハ其ノ新教徒タル勢力カカソリック教徒ノ爲ニ壓倒セラルルヲ虞ルルコトニ在リ、然ルニ今ウルスター全州ヲ以テ一團トナストキハ新教徒ノ多數ヲ占ムルハ論ナシト雖、他ノ宗徒ノ八十九萬人ナルニ對シカ

ソリック教徒ハ六十九萬人ヲ算シ新教徒ノ勢力ハ必スシモ常ニ安泰ナルヲ保シ難シ、是ヲ以テウルスター州中カソリック教徒ノ多數ヲ占ムル三郡ヲ割テ南部地區ニ屬セシメ、他ノウルスター六郡ヲ以テ北部ノ管轄ニ屬セシメタルナリ、カソリック教徒ヨリ之ヲ見レハ同宗派ノ信徒ヲ南部議會ノ下ニ集合スルモノナルヲ以テ之ニ反對スヘキ所謂ナシ、然レトモ由來愛蘭ノ禍患ハ南北ノ地域的ニ異レル政治的利害ト新舊ノ信仰トカ相纏綿シテ葛藤ヲ彌カ上ニモ甚シカラシムルニ在リ、本案ノ立法ノ趣旨ハ恐ラク新舊兩教徒ノ接觸ヲ避ケテ其ノ抗爭軋轢ヲ緩和セシムルニアランモ安ンソ知ラン却テ兩教徒ヲシテ益壘ヲ固フシテ相排擊スルノ風潮ヲ煽揚シ兩教徒ノ融和ヲシテ永久ニ困難ナラシムル所以ナルヘシトハ。

本案ニ對スル非難ノ細目ニ至リテハ多々アルヘク、詳細ハ法案ヲ知悉スルニ非スンハ盡シ難シト雖、反對論ノ要項ハ前述ノ外ニ出テサルカ如シ、最近英國勞働黨カ委員ヲ愛蘭ニ簡派シテ其ノ政情ヲ究メ愛蘭法案ニ對スル意見ヲ定メタルカ同黨ハ政府提出ノ法案ニ反對シ(一)民族自決ノ原則ヲ採用スヘキコト(二)自治領(ドミニオント)同一ノ地位ヲ與フルカ又ハ自治政府ノ形式ヲ決定スルカ爲ニ愛蘭憲法制定會議ヲ起スコト但シ孰レノ場合ニ於テモ國防及外交ハ帝國議會ノ權限ニ留保スヘキコトヲ提議シタリト謂フ。

Lib

終